大東文化大学紀要44号

動詞重畳型に関する通時的研究（八）
—「三言」を中心に—

大　島　吉　郎

A Diachronic Study of the V — V Form (VIII)

Yoshiro Oshima

内　容　提　要

本文试图描述并探讨明末冯梦龙编撰的“三言”里动词重叠式使用情况。

“三言”指的是《古今小说》、《警世通言》、《醒世恒言》三部短篇小说集，共120篇。其语言包含着宋、元、明各个时代比较广泛的口语成分。可就动词重叠各种句式来看，却查不出明显的特征。本文得出的结论是：

(1) 例子不多。

(2) 句式不多。

(3) 二音节动词重叠式用得很少。

(4) 单音节动词〈V一V〉式居多。

(5)〈V（了）n V〉式用得相当多。

[目　次]

0．はじめに

1．《古今小説》

1．1．単音節動詞

1．1．1．VV

1．1．2．V了V儿

1．1．3．VVO

1．1．4．V一V

1．1．5．V了一V

1．1．6．V一VO

1．1．7．VO一V

１．１．８．Ｖ了Ｏ一Ｖ
１．１．９．ＶＶ看
１．２．二音節動詞
１．２．１．ＶＶ
２．《警世通言》
２．１．単音節動詞
２．１．１．ＶＶ
２．１．２．ＶＶＯ
２．１．３．Ｖ一Ｖ
２．１．４．Ｖ了一Ｖ
２．１．５．Ｖ一ＶＯ
２．１．６．ＶＯ一Ｖ
２．１．７．Ｖ一Ｖ看
２．２．二音節動詞
３．《醒世恒言》
３．１．単音節動詞
３．１．１．ＶＶ
３．１．２．ＶＶＯ
３．１．３．Ｖ一Ｖ
３．１．４．Ｖ一Ｖ儿
３．１．５．Ｖ了一Ｖ
３．１．６．Ｖ一ＶＯ
３．１．７．Ｖ了一ＶＯ
３．１．８．ＶＯ一Ｖ
３．１．９．Ｖ了Ｏ一Ｖ
３．２．二音節動詞
３．２．１．ＶＶ
３．２．２．Ｖ一Ｖ
４．おわりに
注
参考文献
引用書目

0．はじめに

本稿は明末天啓年間（1621～1627）頃に刊行された《古今小説（喩世明言）》、《警世通言》、《醒世恒言》、すなわち「三言」と総称される資料における動詞重畳形式について、記述を行おうとするものである。

「三言」は馮夢龍の撰にかかるが、彼によって多方面から収集され、編集を経た各四十巻、合計百二十巻の物語が、言語の面からだけ見ても多様な要素を含んでいることは、夙に詳細な報告がなされている(1)。本稿では、馮夢龍の言語、また各巻の成立を考える上で、動詞重畳形式の使用状況がどのような判断材料となるかを、改めて検討してみることにしたい。

テキストには以下の資料を用いた。

《古今小説》許政揚校注、1979年、人民文学出版社。

《警世通言》厳敦易校注、1980年、人民文学出版社。

《醒世恒言》顧学頡校注、1979年、人民文学出版社。

なお、人民文学出版社《醒世恒言》では第23巻が削除されているため、この巻は以下の影印本を用い用例を示す。

《醒世恒言》明天啓丁卯葉敬池刊本影印、1973年、台湾世界書局。

各巻における状況が明らかとなるよう、「三言」すべての用例を掲げ、出現順とした。

1．《古今小説》

1．1．単音節動詞

1．1．1．ＶＶ

全12例、動詞の種類は7。会話文中での用例が大半を占める。顕著な傾向は、全12例中5例が第1巻に用いられている点である。“一”を含まない＜ＶＶ＞類の形式が現れる巻は、成立時期が比較的晩いか、後人の筆が入った可能性が考えられる。

――借、看、去、睡、用、走、坐

“…，特央乾娘去<u>借借</u>。”（01巻，009页）

“…，正要问他女眷<u>借借</u>。”（01，009）

“…，借他东西<u>看看</u>。…。”（01，011）

…，与老人家<u>坐坐</u>。（01，013）

“…，时常过来<u>走走</u>。（01，013）

“…，不如在师父房内<u>睡睡</u>。（04，089）

“…，且讨些干净热水<u>用用</u>。（05，098）

“…，要你依我<u>去去</u>。（22，328）

…，不免平康巷中走走。(22,333)

“…，带他出来走走，…。(28,420)

“…。我且自去看看，怕怎的？”(40,629)

“…，我们好意容他去走走，…。”(40,631)

1.1.2. V了V儿

全1例、動詞の種類1。「三言」において“儿”を接辞する例は極めて稀で、他には《醒世恒言》に<V一V儿>が1例見られるのみである。

——张

…，那家童在照壁后张了张儿，向西边走去了。(40,629)

同じく第40巻に動作の反復を示す<V了又V>の例が並行して用いられるが、全巻を通してこの1例のみであり、<V了V>言い換えとしての修辞面における共通性を見出すことは難しい。例えば、

李万一时粗莽，直撞入厅来，将照壁拍了又拍，大叫道：…。(40, 629)

1.1.3. VVO

全9例、動詞の種類は4。賓語の類型は、物、事、人の三点にまとめることができる。

（1）物：街坊景象、奴家房里、脉息、阮三坟墓、人数、父亲遗笔

（2）事：体面

（3）人：丈人丈母、外甥女

本来、賓語が「人」に関わる名詞、代名詞、固有名詞、呼称等であれば<VOV>タイプを使用するはずであるが、《古今小説》をはじめ「三言」全体に<VOV>の例は用いられない（これに対し<VO一V>が一般的である)。可能性から言えば、賓語が「人」に関わる<VVO>型が現れる巻（第1、5巻）は、成立について検討の余地があると考えられる。

——点、看、认、装

…，一力劝主母在楼前去看看街坊景象。(01,005)

…，只说去看看丈人丈母，依旧到船上住了一晚。(01,023)

“官人认认奴家房里。”(03,073)

“阿哥，借你手我看看脉息。”(04,083)

…，就去看看阮三坟墓。(04,092)

…，就便先看看外甥女。(05,103)

“…，今日先要件衣服，装装体面。”(10,153)

到庄点点人数，止存六十馀人。(39,602)

“…，好教他认认父亲遗笔。”(40,639)

1.1.4. V一V

全21例、動詞の種類は14。この形式は《古今小説》の中では用例数、動詞のバリエーション

が最も豊富である。

——抱、撮、等、分、解、看、覷、认、睡、探、跳、贴、叙、寻

“…，劳你大家寻一寻。”(01,017)

席间夫人把女儿守志一事，略叙一叙。(02,044)

“你仔细认一认，那夜间园上假装鲁公子的，可是这个人？”(02,057)

“官人，你将头上金簪子来借我看一看。”(03,065)

“…。二位太保宽坐等一等，不要催促。”(03,074)

“…，至今未好，借解一解。”(04,086)

“小姐，你到初八日同奶奶到我小庵覷一覷，若何？”(04,087)

“…。小姐去我房中拴上房门睡一睡，自取个稳便，…。”(04,089)

“秀才，我与你到接官亭上看一看。”(11,172)

略看一看，慌忙退步，惟恐坠下。(13,197)

因婆留出力，议定多分一分与他。(21,304)

“…。官人不信时，媳妇同去看一看，好么？”(24,373)

“既已到此，可同去阁子里看一看。”(24,375)

…，便叫张公，借看一看。(26,393)

张公接过银子，看一看，将来放在荷包里，…。(26,393)

“…，将热肚皮贴一帖，救妾性命。(29,431)

到皇辅甫殿直门前，把青竹廉掀起，探一探，便走。(35,516)

宋四公把那妇女抱一抱，撮一撮，拍拍惜惜，…。(36,536)

布帘内瞧一瞧，…。(38,572)

“如若杀得一个人，杀下的鸡在地下跳一跳；杀他两个人，跳两跳。”(38,580)

《古今小説》に見られる特徴は、＜一V＞に数量補語としての性質を残す例がある点であり、第21巻“分一分”の例は、“一分”が補語として機能する面を考慮する必要があろう。数量補語と動詞重畳形式のはざまに位置する中間的な用例であり、それは、現代漢語では消えてしまっているが、数詞に“两”“四”“几”などを用いる例のあることからも裏付けられよう。例えば、

“如若杀得一个人，杀下的鸡在地下跳一跳；杀他两个人，跳两跳。”(38,580)

…，那鸡在地下一连跳了四跳，重复从地跳起，…。(38,580)

…，只见那小鸟儿，将头颠两颠，…。(21,317)

李氏把手在水盆里连画几画，…。(19,276)

1.1.5. V了一V

全10例、動詞の種類は5。用例はすべて地の文に現れ、状況描写に用いられる。動詞は“探”以外、動作性の薄いものが大半を占めている。

——看、瞧、认、探、笑

管家婆出来瞧了一瞧，慌忙转身出去，…。(02,048)

…，已知其意，笑了一笑，便教撤了筵席，…。(06,108)

未暇叙话，各睁眼看了一看，抱头而哭，…。(08,128)

…，教那王婆看了一看，吓杀那王婆。(15,224)

夫人也笑了一笑，收过了。(15,225)

王兴假意认了一认，两下抱头而哭。(18,264)

…，只见卖馉饨儿的小厮掀起帘子，猖猖狂狂，探了一探，便走。(35,516)

打开荷叶看了一看，…。(36,534)

…，拨开馒头馅儿，看了一看，…。(36,538)

侯兴揭起被来看了一看，…。(36,539)

1.1.6. V－VO

全２例、動詞の種類は２。賓語は「人」に関わる名詞と身体部位。

（1）人：妻子

（2）身体部位：手

このケースにおいても賓語が「人」であれば本来＜VO－V＞となるべきもの。しかし第２巻の例は人称代名詞ではないことから、＜VVO＞の場合と同じく、語順の制約を受けていないものと考えられる。

――拱、认

“贤婿，你今番认一认妻子。”(02,050)

说罢，拱一拱手，踱出门去了。(09,141)

1.1.7. VO－V

全２例、動詞の種類は２。賓語はいずれも人称代名詞“我”。

――见、看

“…，将带他来见我一见，万不妨事。”(04,083)

“甚意思，看我一看了便走？”(35,516)

1.1.8. V了O－V

全１例。賓語は人称代名詞“他”。

――看

妾心怀怨恨，又不敢啼哭，斜看了他一看。(31,470)

1.1.9. VV看

全１例。

――称

那李吉取出三块银子，称称看到有一两二钱，…。(26,393)

懐から銀子を取り出し、重さを量ってみると１両２銭あったので、の意。“看”に実義とし

ての「見る」意は窺われない。《古今小説》に前置型＜试Ｖ（一）Ｖ＞は現れず、後置型＜Ｖ（一）Ｖ看＞もこの１例のみ。

１．２．二音節動詞

１．２．１．ＶＶ

全１例。二音節動詞の重畳形式＜ＶＶ＞（＜ＡＢＡＢ＞型）が１例のみである点は極めて特徴的であり、他の資料との差異は歴然としている。例えば、

《西遊記》：65例

《金瓶梅詞話》：39例

状況から判断すれば、

《清平山堂話本》：１例

《水滸傳》：２例

《元曲選》：７例

などとの類似性を指摘することができる(2)。

——等候

“…。老哥，烦你在此等候等候，替我到下处医了肚皮再来。”（40,629）

＜ＡＡＢＢ＞型には以下のような例が見られるが、相補的な関係にあるわけではない。例えば、

啼啼哭哭（01,004）

欢欢喜喜（01,013）

夜间絮絮叨叨（01,017）

骗得欢欢喜喜（01,020）

悲悲咽咽（01,025）

惹得老婆啼啼哭哭（01,027）

翻翻覆覆只是不愈（01,027）

遮遮掩掩（02,045）

只听得哽哽咽咽的哭了进去（02,049）

只听得这几家邻舍指指搠搠（03,068）

免不得点点搠搠（04,093）

哽哽咽咽哭将起来（03,076）

呜呜咽咽的又吹唱起来（04,081）

拖拖拽拽（06,111）

唧唧哝哝（10,148）

哭哭啼啼（20,287）

他两个挨挨擦擦（23,359）

摇摇摆摆（25,391）

哽哽咽咽哭将起来（29,430）

把那妇女抱一抱，撮一撮，拍拍惜惜（36,536）

哭哭啼啼（36,547）

点点搠搠（36,548）

来来往往（36,554）

哭哭啼啼（38,575）

啼啼哭哭（40,635）

2.《警世通言》

2.1. 単音節動詞

2.1.1. VV

全８例、動詞の種類は３。用例はいずれも会話文中に現れており、口語表現であることを窺わせる。

“看”が５例を占める。

——看、歇、用

“…，就教同可常到府中来看看。”（07,083）

“且拿几个来用用。”（15,215）

“先生仔细看看，不要轻谈。”（17,236）

“…。我到庙里歇歇再走。”（24,348）

“三婶，你不信，跟我到庙中看看去。”（24,349）

“…。房中那四个一发唤出来与他看看，满他的心愿。”（26,404）

“你去邻家借把锄头来用用。”（31,480）

“我去看看便来。”（38,580）

2.1.2. VVO

全11例、動詞の種類は５。動詞は“看”が７例を占める。賓語は以下のように四つのケースに整理することができる。

（1）場所・空間：清湖河里、天、场、袖内

（2）人：吴教授、十帝阎君、玉堂春、老奶奶

（3）事：信音、的确

（4）物：气

「人」に関わる名詞が賓語に現れるのは《古今小説》と同様であり、原則的には＜VOV＞とすべきもの。第14巻、第24巻の２巻にわたって４例見られる。

——观、看、摸、问、消

…，走出门，看看清湖河里，扑通地都跳下水去了。(08,101)

只见一个癞道人，看看吴教授道：…。(14,194)

“你先去，我两边看看十帝阎君。”(24,350)

“…，你也看看玉堂春。”(24,351)

长吁一口气，只看看天。(24,355)

“…。我去看看老奶奶和姐姐兄嫂讨些盘费，…。”(24,355)

“…，今日特来问问三舅的信音。”(24,356)

“消消气再处。”(24,357)

“…。出去观观场，下科好中。”(24,359)

“你看看的确，怕你识不得字。”(24,362)

摸摸袖内，一粒金丹尚在，宛如梦中所见。(30,467)

2.1.3. V－V

全31例、動詞の種類は19。会話文中での用例が25例を占める。“看”が10例で、最も用例が多い。

——冲、等、抖、躲、放、幌、浸、看、抹、卖、摸、弄、认、推、想、张、住、走、坐

那厮想一想道：…。(05,057)

“我只借坐一坐，…。”(06,069)

“…，等一等来问。”(06,070)

掀起帘子看一看，…。(08,100)

“…，正好乘着冷静时去看一看。”(11,128)

“…，请去认一认。”(11,150)

教授把三寸舌尖舐破窗眼儿，张一张，喝声采不知高低，…。(14,190)

“且在这里躲一躲。”(14,192)

“…，怎地得个生人来冲一冲！”(14,193)

…，嘴也不抹一抹，…。(15,200)

则见李媒把张媒推一推，…。(16,223)

“…。我且胡乱去卖一卖。”(20,285)

“不妨，看一看就回。”(24,341)

“…，我在这里坐一坐。”(24,359)

“我们到城里略走一走，…。”(26,402)

“老先生请认一认，…。”(26,408)

“你等一等，我便叫他出来。”(28,429)

“我和妻子说一声，也去看一看。”(28,430)

“…，我也看一看就来。…。”（28,430）

“…，你去看一看。”（28,432）

“一者不曾认得金山寺，要去看一看；…。”（28,439）

“…，你且去张一张了来。”（28,442）

“…。略放一放！”（28,444）

“梢工，你可住一住，…。”（33,509）

“…，我且去偷看一看，什么样嘴脸？…。”（35,536）

“且去看一看。”（36,549）

“你且开盒子先看一看，是甚么物件。”（36,553）

…，见陶铁僧舒手去怀里摸一摸，…。（37,556）

“…，空中抖一抖，…。”（37,557）

“…，试把来与许逊弄一弄，…。”（40,628）

…，向风中幌一幌，就有屋桷般大。（40,628）

“…，常要水中去浸一浸。…。”（40,632）

《古今小説》のところでも触れたが、＜V（了）nV＞の用例が存在する点は示唆的である。例えば、

“…，把金钗去那树上敲三敲，…。”（36,552）

…，把铜钱掷了六掷，…。（40,599）

幌两幌，就有竹竿般长。（40,628）

…，取出那根铁杵来，幌了两三幌，望空抛起，…。（40,629）

2.1.4. V了一V

全8例、動詞の種類は2。用例はすべて地の文におけるもの。“看”が7例を占める。

——看、照

…，正面来，把崔宁看了一看，崔宁却不见这汉面貌，…。（08,095）

迎儿接得物事在手，看了一看，…。（13,177）

张主管看了一看，…。（16,228）

…，扬开缸盖，只看了一看，…。（19,264）

…，则看了一看，喝声采。（19,265）

里面一个老婆婆，开出来看了一看，…。（21,299）

叫丫头拿过镜子来照了一照，…。（24,359）

秀姑仔细看了一看，…。（35,544）

一見＜V了一V＞と紛らわしい用例も見られる。次に示す例では、“一分”は“一份”と記されるべきものであり、形の上からは＜V了一V＞であるが、文脈上、数量補語として読まれる。

打开笼仗里金银细软头面事物，做三分：陶铁僧分了一分；焦吉分了一分；大官人分了一分。

(37, 560)

2．1．5．V－VO

全２例、動詞の種類は２。一文中に二つの例が並列され、対にして用いられている。“会”の例は賓語が「人」であるところから、＜VO－V＞とすべきもの。しかし＜V（－）VO＞にも見られるように、賓語の性質による語順の制約が必ずしも強制的にはたらかない実際があり、この場合においても、修辞的形式を整える意図から、制約をはずしたものと考えられる。

――会、看

少不得去看一看坟墓，会一会亲友。(01, 001)

2．1．6．VO－V

全11例、動詞の種類は５。賓語はすべて「人」に関わる語。

（1）人称代名詞：他

（2）固有名詞：子瞻

（3）呼称：愚兄、老夫

――看、考、试、问、照

“…。我再试他一试。”(01, 005)

“…，到晋阳来看愚兄一看，这就是‘游必有方’了。”(01, 007)

“…。老夫不自揣量，要考子瞻一考。”(03, 033)

“…。子瞻到先考老夫一考，然后老夫请教。”(03, 033)

“…。老夫还席，也要考子瞻一考。子瞻休得吝教。”(03, 034)

“…，谁敢出个题目将带纱帽的再考他一考么？…。”(18, 249)

叫老姆姆携烛下去照他一照。(26, 404)

“我也问他一问。”(28, 422)

“明日同你去看他一看，如何模样的先生。”(28, 431)

“…。你引我去试他一试如何？…。”(35, 537)

“…，教你个法儿，且去试他一试。…。”(35, 537)

2．1．7．V－V看

全１例。《古今小説》に１例＜VV看＞がみられたが、「三言」における嘗試型は生産性を有していない状況が読み取れる。

――看

“那个伯伯肯与奴家拽过我的丈夫尸首到岸边，奴家认一认看。奴家自奉酒钱五十贯。”(33, 509)

大意は「どなたか夫の遺体を川岸まで引き寄せてくださる方はおいでになりませんか、この目で確かめてみたいのです。お礼に五十貫さしあげます。」川に浮いている遺体がどうも自分の夫のようだが、遠くからではしっかり確かめようがない。そこで見物人のなかから誰か頼めないか

という内容。“看”は＜Ｖ看＞としても用いられている。例えば、

王酒酒认得乔家董小二的尸首，口里布说出来，只教程氏认看。(33, 509)

２．２．二音節動詞

本稿の調査の限りでは、《警世通言》に二音節動詞の重畳形式の用例は得られなかった。用例が見られないという事実は、本書の言語的特長の一つとして捉えることができよう。

＜ＡＡＢＢ＞型は《古今小説》と共通して、多くの例が見られる。例えば、

哭哭啼啼 (01, 016)

哭哭啼啼 (05, 059)

踉踉跄跄 (06, 069)

摇摇摆摆 (08, 094)

唧唧哝哝 (11, 136)

哭哭啼啼 (11, 138)

哭哭啼啼 (11, 140)

殷殷勤勤 (12, 159)

哭哭啼啼 (12, 162)

哭哭啼啼 (15, 211)

絮絮聒聒 (15, 211)

哭哭啼啼 (21, 292)

唧唧哝哝的讲了一会方法 (21, 296)

众苍头拖拖拽拽 (22, 313)

哭哭啼啼 (22, 320)

拖拖拽拽扯进去坐了 (24, 342)

又呜呜咽咽的哭道 (25, 394)

啼啼哭哭 (25, 393)

欢欢喜喜 (31, 480)

若听我言语喜喜欢欢 (28, 441)

呜呜咽咽 (31, 493)

禁不住呜呜咽咽的啼哭 (35, 541)

哭哭啼啼 (40, 615)

3.《醒世恒言》

3.1. 単音節動詞

3.1.1. VV

全30例、動詞の種類は11。若干の例を除いて、大多数が会話文中に用いられている。用例数は「三言」の中では最も多い。全16巻に渡って30例見られるが、用例の分布に顕著な偏りは窺えない。“看”と“瞧”の分布について言えば、10例：1例であり、“看”が多用される。

——尝、看、瞧、去、踏、顽、用、游、翘、走、坐

“…。我们何不进去看看？”(04,082)

“…。待我们去看看。”(04,087)

“…。明日索性到张衙内这几个泼男女看看，羞杀了他。”(04,087)

“…，后日看看，便是。”(04,088)

“你且把我看看。”(06,125)

“…。你去把来与兄弟看看，…。”(06,125)

“…。我也暂时走走，就去睡的。”(08,166)

“…，即来走走，万勿爽信。”(10,209)

一步步任意走走，…。(15,279)

“…。要问院主借工钱用用。”(15,291)

“…。你怎一向不到我家走走？…。”(16,312)

“大娘，你也看看，…。”(16,314)

“你一发拿出来与我瞧瞧。”(16,315)

“…，只好看看罢。”(23,14b,08)

“请进来，坐坐去。”(23,30b,04)

“这是什么时候了，还说坐坐。”(23,30b,04)

把眼翘翘，把脚踏踏，分明是醒的，…。(25,511)

…，不免随着他船游去看看。(26,529)

“…，与你看看！”(26,535)

“…，停一会等我送你到滚锅儿里再游游去。”(26,536)

“…，到我铺上去睡睡。…。”(27,556)

“…。先打个样儿与你尝尝。”(27,568)

“…。还不到床上睡睡？”(28,587)

“你且仔细看看，莫要买了破的。”(29,606)

“…，我去去，闲时再来。”(34,712)

“…，便走走去何妨。…。”(37,788)

“…，且待我悄悄的开来看看。…。”（38,817）

“…，也该让我来顽顽，…。”（39,846）

“…，常来走走。”（39,847）

第25巻“把眼翣翣，把脚踏踏”は「目をぱちぱちまばたきさせたり、足をばたばたさせたり」の意に解すことができる。よって「～したり…したり」の例と考えられる。

３．１．２．ＶＶＯ

全17例、動詞の種類は10。賓語のタイプは以下の五つに分けられる。

（１）物：花儿、滋味、月

（２）身体部位：头儿、手、眼、口儿

（３）場所・空間：里面、家里

（４）事：漆价、数

（５）人称代名詞・呼称：他、老身、菩萨

人称代名詞・呼称が＜ＶＶＯ＞の賓語となる例は《古今小説》、《警世通言》にも見られ、「三言」に共通する事例である。第19巻、第27巻、第39巻が該当する。

――尝、点、拱、见、举、看、漱、问、翣、照

“…，衙内止看看花儿，酒还到贵庄上去吃。”（04,084）

那少年睁眼看了一看，点点头儿。（10,207）

向灯下照照里面时，…。（13,254）

…，心中也欲得尝尝滋味。（15,292）

“…。我老夫到时常走去看看他，也当做亲人一般。…。”（19,394）

“员外，小子今晚要回去看看家里，…。”（20,403）

拱拱手，原向府内去了。（20,410）

“…。到不如自家看看月，倒还有些趣。”（23,18b,01）

“小官人转来，是必再看看老身，莫要竟自过去！”（27,557）

每常时，翣翣眼便过了一日。（28,585）

泻杯茶漱漱口儿，…。（28,589）

“…，怎不去问问漆价？…。”（35,749）

“那银两你可曾可曾见见数么？”（〈35,750）

…，把眼看了两看，点点头儿，…。（35,755）

“…，翣翣眼就弄完了。…。”（37,792）

深深作了个揖起来，举举手大踏步就走，…。（37,792）

“我且问问菩萨，此去可能得遇。”（39,839）

第39回の“问问菩萨”は、寺院の観音殿に参り、観音菩薩に拝礼し、お御籤を引いて、ある人との出会いが適うかどうかを確かめてみようという内容。“菩萨”は擬人化され、文法的には

「人」と同じ扱いがなされている。

3．1．3．V－V

全35例、動詞の種類は23。

——掰、帮、拨、尝、扯、抽、颠、动、烘、讲、绞、看、瞧、清、认、推、闻、想、羞、整、准、坐

又想一想道：…。(03, 055)

…，又想一想，他是有势力的人，…。(04, 084)

勤自励想一想道：…。(05, 107)

“…，有火在此，烘一烘暖活也好。”(10, 202)

冉贵偶然将小指头拨一拨，拨断了两股线，…。”(13, 254)

闻一闻见香便吃了。(14, 271)

“…，起去看一看。”(14, 271)

“…，我自起去看一看。”(14, 271)

“…。也得小生认一认。”(15, 282)

…，只得把身上破衣裳整一整，…。(17, 345)

“有人再里边，你进去认一认。”(17, 349)

施复自己也摸出等子来准一准，…。(18, 360)

把手颠一颠，约有六两多重。(18, 360)

“…。待我教丈夫出来，认一认可是？”(18, 365)

“你们垫得不好，须还要重整一整。”(18, 372)

“…。你们各自去想一想。…。”(20, 410)

…，上前先看一看，…。(20, 440)

“…，拿与我看一看。”(23, 14a, 10)

“待我拿去与夫人瞧一瞧，…。”(23, 14b, 09)

“…，待这标致人来替夫人掰一掰，…。”(23, 24b, 01)

“…，羞一羞，抽一抽，羞两羞，抽两抽，…。”(23, 25a, 04)

“…，一发央他绞一绞，…。”(23, 25b, 01)

“老爷仔细看一看，不要错认了。…。”(23, 31a, 04)

…，如醉如痴，酒也不沾一滴，箸也不动一动。(28, 582)

“…，暂请到监里去坐一坐。”(29, 616)

将笔还了和尚，把破葛衣整一整，…。”(30, 629)

…，那贼略推一推，豁地开了。(33, 696)

“你仔细看一看，还是远方人，…。”(34, 718)

“一郎快来帮一帮。”(34, 724)

…，若有缘的尝一尝，…。(38, 819)

回去又想一想道：…。(38, 821)

“…，把玄妙与弟子们细讲一讲，…。”(38, 832)

“…，将心境清一清，…。”(38, 832)

＜V一V＞に結果補語を伴う例が１例だけ見られる。例えば、

待要与他扯一扯直，岂知是个僵尸，…。(38, 832)

３．１．４．V一V儿

全１例。「三言」における＜V一V儿＞はこの例１例のみ。

——会

“…，他思量要与你夫人会一会儿，…。”(23, 16a, 09)

次に示す例は、動詞“面会”に“一会”が数量補語として後置しているもの。動詞が“会”であれば形式の上からは重畳型と考えられるケースである。しかしそのような場合、“一会”が動詞“会”の臨時量詞であるか、それとも時間量を表数量詞なのか判然としないことになる。例えば、

“…，那高老定要掀请我去面会一会，然后行聘。…。”(07, 136)

３．１．５．V了一V

全32例、動詞の種類は13。用例はすべて地の文におけるもの。会話文中での例は《西遊記》、《金瓶梅詞話》、《醒世姻縁傳》などにも見られるが(3)、極めて少数で、とりわけ短編集である「三言」においては地の文での使用が中心となる。動詞は“看”が10例、“想”が11例を占める。

——呆、点、看、苦、起、曲、伸、推、望、想、相、笑、准

想了一想 (01, 003)

呆了一呆 (06, 123)

看了一看 (06, 125)

想了一想 (07, 136)

想了一想 (07, 140)

又想了一想 (08, 159)

想了一想 (08, 169)

只把臀儿略起了一起，腰儿略曲了一曲 (09, 180)

望了一望 (10, 203)

睁眼看了一看 (10, 207)

想了一想 (10, 209)

仔细看了一看 (13, 254)

想了一想 (15, 287)

仔细看了一看 (16, 311)

细细看了一看（16, 314）

相了一相（16, 316）

想了一想（16, 322）

想了一想（16, 326）

又苦了一苦（17, 346）

看了一看（18, 358）

将秤准了一准（18, 360）

看了一看（18, 372）

把女待诏推了一推（23, 26b, 03）

在额上点了一点（26, 529）

把腰伸了一伸（28, 587）

微微笑了一笑（28, 587）

仔细看了一看（29, 616）

又想了一想（30, 643）

看了一看（33, 697）

回头看了一看（34, 724）

又想了一想（38, 821）

「三言」に“一”が省略された＜V了V＞型は現れない。“一V”が数量補語としての性質を強く残している様子は、やはり《醒世恒言》でも＜V（了）nV＞の用例に見ることができる。例えば、

…，连跳几跳的溜溜滚去，滚入一个地穴里。（01, 003）

…，把签筒摇了几摇，扑的跳出一签。（07, 134）

推了几推，只听得呀的房门声响。（21, 472）

“…，羞一羞，抽一抽，羞两羞，抽两抽，…。”（23, 25a, 04）

“…，那啄木鸟把尖嘴在那树上画了几画，摇了几摇。…。”（23, 37a, 03）

向窗门上轻轻弹了三弹。（28, 586）

…，把眼看了两看，点点头儿，奄然而逝。（35, 755）

…，手足乱动，扑的跳了几跳，直挺挺横在床上不动了。（36, 764）

少数ながら、“了”に換えて“得”を用いる例も見られる。例えば、

“…，把甚的在夫人门上画得几画，摇得几摇。…。”（23, 37a, 06）

“上”の例もある。例えば、

那银匠接银在手，翻覆看了一回，手内颠上几颠，…。（16, 308）

…，撞得这船幌上几幌，睡的床铺，险些颠翻。（36, 765）

３．１．６．Ｖ－ＶＯ

全17例、動詞の種類は14。賓語のタイプは以下の五つ。

（１）物：我手中的宝剣、宝、声、家私、衣裳

（２）身体部位：眼睛、手、腰、脚

（３）動物：猪儿

（４）人：亲族、乡党

（５）事：理

――擦、分、缚、拱、会、举、评、请、曲、认、识、则、站、整

“…。我只教他认一认我手中的宝剣！”（05,107）

…，吃了一惊，擦一擦眼睛，…。（09,188）

“来得极好！且相帮我缚一缚猪儿。”〈16,317）

…，备个筵席，会一会亲族，请一请乡党。（17,332）

…，向主人家拱一拱手，叫声有劳，…。（18,360）

老儿举一举手道：…。（18,372）

“…，要去拿来与夫人识一识宝。”（23,20a,01）

若还则一则声，又重新打起。（27,565）

…，把大拇指掐住，曲一曲腰，…。（34,711）

…，把大拇指掐住，曲一曲腰，…。（34,712）

“…，分一分家私与我。…。”（34,734）

“…，分一分家私与我。…。”（34,734）

打罢起来，整一整衣裳，忍着疼痛，…。（35,739）

“老翁来得恰好！与我评一评理。”（37,793）

李清起来伸一伸腰，站一站脚，整衣拂履，…。（38,814）

第34巻“分一分家私”の例は“一分”が数量補語であると見ることも可能であるが、判断の根拠が明確でないため、本稿では＜Ｖ－ＶＯ＞型の例とする。

３．１．７．Ｖ了－ＶＯ

全２例、動詞の種類は２。賓語のタイプは一種類のみ。

（１）身体部位：头、口

――点、顿

美娘点了一点头，打发丫鬟出房，…。（03,056）

颜俊顿了一顿口道：…。（07,141）

３．１．８．ＶＯ－Ｖ

全９例、動詞の種類は８。賓語のタイプは人称代名詞と職掌の名称。いずれも「人」を指し、変則的な用例は見られない。

（1）人称代名詞：他

（2）職掌の名称：右丞

——见、看、盘、陪、瞧、试、吓、羞

“…。也得老身见他一见，与他讲道方好。”（03,063）

“…，也把那老禽兽羞他一羞。”（05,108）

“…。且请先生和儿子出来相见，盘他一盘，便见有学无学。”（07,138）

“…。且去看他一看。”（09,188）

“…，他今日正在兴头上，我且羞他一羞。”（20,440）

夫人略瞧右丞一瞧，连心都瞧见了。（23,22a,07）

“…，扶醉陪他一陪也罢。…。”（29,608）

…，且戏言吓他一吓，便道：…。（33,695）

“…，何不去试他一试？”（35,748）

3.1.9. V了O－V

全1例。賓語の“冉贵”は固有名詞。《古今小説》にも＜V了O－V＞の例が1例見えるが、あらゆる資料を通じて用例は極めて少ない。

——看

老汉住了手，抬头看了冉贵一看，便道：…。（13,259）

3.2.二音節動詞

《醒世恒言》に、二音節動詞の重畳型は全5例見えるのみであるが、「三言」のなかでは《古今小説》、《警世通言》に比して、突出して多い印象を受ける。

3.2.1. VV

全3例、動詞の種類は3。

——计较、玩耍、行走

“正是，大娘从容计较计较，老身明早来也。”（08,159）

“…。偷些工夫同我到街坊上玩耍玩耍，请你吃三杯，可好么？”（17,348）

廷秀也随着行走行走。（20,426）

3.2.2. V－V

全2例、動詞の種類は2。

——撒漫、消散

一心思量要寻个清凉去处消散一消散，或者这病还有好的日子。（26,526）

“…，我说是用不尽的；不知略撒漫一撒漫，便没有了。…。”（37,791）

＜AABB＞型は《古今小説》、《警世通言》にも増して多用されている。例えば、

没一刻啼啼哭哭（01,004）

踉踉跄跄（04,082）

哭哭啼啼（04，093）

啼啼哭哭（05，105）

哽哽咽咽（05，106）

啼啼哭哭（08，156）

呜呜咽咽哭将起来（08，166）

哭哭啼啼（09，182）

哭哭啼啼， 絮絮聒聒（09，183）

絮絮聒聒（09，185）

拥拥簇簇（12，233）

唧唧哝哝（13，249）

唧唧哝哝（13，250）

挨挨擦擦（13，252）

有些唧唧哝哝（16，319）

哭哭啼啼（16，324）

啼啼哭哭（17，343）

一家都欢欢喜喜（18，367）

不住吱吱喳喳（18，367）

哭哭啼啼（19，381）

啼啼哭哭（19，382）

哽哽咽咽（19，387）

啼啼哭哭（20，427）

扯扯拽拽（23，14a，10）

咂咂咬咬（23，31b，05）

说说道道（23，25a，04）

欢欢喜喜（23，34a，06）

呜呜咽咽歌将起来（25，511）

哭哭啼啼（26，526）

啼啼哭哭（27，547）

巴巴结结（33，703）

哭哭啼啼（32，687）

踉踉跄跄（30，645）

唧唧哝哝（28，591）

啼啼哭哭（34，722）

啼啼哭哭（35，755）

啼啼哭哭 (38, 813)

重重疊疊 (39, 844)

4. おわりに

「三言」における動詞重畳形式の特徴は以下のようにまとめることができる。

（1）用例数が少ない。

（2）形式の種類が少ない。

（3）二音節動詞の用例が極端に少ない。

（4）単音節動詞＜V－V＞の用例が＜VV＞より多く用いられる。

（5）＜V（了）nV＞の用例が比較的多く見られる。

次に、賓語が「人」である場合の例について、語順の違いから各巻の状況をまとめておくことにしたい。

［表1］

	《古》	《警》	《醒》
VVO	01 05	14 24	19 27 39
V－VO	02	01	17
VO－V	04 35	01 03 18 26 28 35	03 05 07 09 20 23 29 33 35
V了O－V	31		13

《警世通言》第1巻だけが賓語の語順をめぐって調和を欠くが、他のケースにおいては併用される状況にはないことがわかる。佐藤晴彦1988では《醒世恒言》第17巻について、入話は馮夢龍の創作の可能性が高いことを指摘しているが(4)、＜V－VO＞の例はその証左となる例ではないかと考える。しかし、総じて言えることは、このような動詞重畳型の使用状況が、直接的に物語の成立、及び書き手の言語的特長を規定する要素にはなりにくいということである。

最後に「三言」における用例を一覧表にして示しておくことにする。

［表２］

		《古》	《警》	《醒》
単音節	ＶＶ	12	8	30
	ＶＶＯ	9	11	17
	Ｖ一Ｖ	21	32	35
	Ｖ一Ｖ儿	0	0	1
	Ｖ了一Ｖ	10	8	32
	Ｖ一ＶＯ	2	2	17
	Ｖ了一ＶＯ	0	0	2
	ＶＯ一Ｖ	2	11	9
	Ｖ了Ｏ一Ｖ	1	0	1
	Ｖ一Ｖ看	0	1	0
計		59	73	144

二音節	ＶＶ	1	0	3
	Ｖ一Ｖ	0	0	2
計		1	0	5

注

（１）香坂順一1968、1969、1983など。佐藤晴彦1986、1988、1990等参照。また最近では譚耀炬著《三言二拍語言研究》（巴蜀書社2005年刊）が挙げられる。

（２）大島2003、pp.220 参照。

（３）大島2001、pp.７、大島 2002、pp.372、大島2003、pp.213参照。

（４）佐藤晴彦1988、pp.38表３。

参考文献

香坂順一 1968.「《三言》のことば（一）」『人文研究』第19巻第10分冊。

――― 1969.「《三言》のことば（二）」『人文研究』第20巻第10分冊。

――― 1983.『白話語彙の研究』。光生館。

佐藤晴彦 1986.「《古今小説》における馮夢龍の創作―言語的特長からのアプローチ」『東方學』第72輯。

――― 1988.「《醒世恒言》における馮夢龍の創作（Ⅰ）―言語的特長からのアプローチ」『神戸外大論叢』第39巻第６号、pp.19-40。

――― 1990.「《醒世恒言》における馮夢龍の創作（Ⅱ）―言語的特長からのアプローチ」『神戸外大論叢』第41巻第４号、pp.1-23。

大島吉郎1999.「動詞重畳型に関する通時的研究（一）――《水滸傳》を中心に」『大東文化大学

紀要』第37号。pp.215-233。
————2000.「動詞重畳型に関する通時的研究（二）——《元曲選》を中心に」『大東文化大学紀要』第38号。pp.59-72。
————2001.「動詞重畳型に関する通時的研究（三）——《西遊記》を中心に」『大東文化大学紀要』第39号。pp.1-16。
————2002.「動詞重畳型に関する通時的研究（四）——《金瓶梅詞話》を中心に」『大東文化大学紀要』第40号。pp.363-382。
————2003.「動詞重畳型に関する通時的研究（五）——《醒世姻縁傳》を中心に」『大東文化大学紀要』第41号。pp.201-223。
————2004.「動詞重畳型に関する通時的研究（六）——《儒林外史》を中心に」『大東文化大学紀要』第42号。pp.201-219。
————2005a.「動詞重畳型に関する通時的研究（七）——《脂硯齋重評石頭記》を中心に」『大東文化大学紀要』第43号。pp.227-247。
————2005b.「二音節動詞重畳型の通時的変化について」『香坂順一先生追悼記念論文集』。光生館。pp.178-189。

引用書目

《古今小说》（全2册），许政扬校注，1979年人民文学出版社。
《警世通言》（全2册），严敦易校注，1980年人民文学出版社。
《醒世恒言》（全2册），顾学颉校注，1979年人民文学出版社。
《醒世恒言》（全3册），1973年台湾世界书局。